

あそ

6

2010





守樸 保多孝三著『柞廬印存』(五)より

守樸（しゅぼく）。出典は『晉書』の「嵇康列伝」の 志在守樸 養素全真  
志樸を守るに在り、素を養いて真を全うす より。

樸は 山から切り出したままの木材。 生まれつき、本質、根源。 ありの  
まま。誠実。と漢和辞典にある。意味は素朴さを守ること。

毎月一度は拙いこの稿をまとめるのに漢和辞典にお世話になる。角川の「字  
源」を使つてきたが印字不鮮明な部分があるのでよい本はないかと図書館で  
見比べた。住居空間がないのでコンパクトなもので、なおかつ……いろいろ  
考慮の結果やはり角川の「大字源」に決めた。決めてからはひたすらヤフー  
オークションの出品を待つてゐた。安価に求めやうと云ふさもしい心根であ  
る。辞書は手元にあるだけで安心する効用がある。

あを

六月



松戸行

金魚泛くあぶらのやうに春の水  
夕つばな濱に来る人歸る人  
春燈は雨の鐵路のむかう側  
晩鐘のいつか止みをり春の雨  
春の夜の家を揺すりて松戸行

本町三 佐藤喜孝

大根を買ふ献立を考へず  
風花や熱き紅茶の紙コップ  
花の雨眠くなるまで本読みて  
青空とふらここを置く水溜り  
新涼の順番を待つ目借時

千駄木 芝 尚子

東閑堂周辺

紫木蓮もの云ふやうに空にむき  
童等は両手ひろげて落花かな  
東閑堂落花は風のさざなみに  
春日和おさな屈みてひそひそと  
坂上のみつ葉つつじのうすピンク

宝仙寺前

芝宮須磨子

驚馬のあくび麒麟にうつる日永かな  
遠景に燈台を置き卒業歌  
金次郎像が書に倦み雀の子  
絞った形に雑巾乾き四月馬鹿  
すもも咲き岬の向かうまた岬

劔地東出つるぎのち とうしで

定梶じよう

吉野山

所 沢 須賀敏子

野仏の頬を染めたる山桜  
日の射して千本桜目醒めけり  
散る花を帽子の中へ受けにけり  
花冷やシフォンケーキの泡たてる  
春や春沖繩の海遠かりし

梅の花「見驚みおどろき」とありかへりみる  
ブロック塀一齣欠けて雪柳  
一族の墓を被へり糸桜  
滝桜染井吉野を見据えをる  
全身に菜の花の黄を貰ひけり

本町三丁目 鈴木多枝子

物の芽

すあま歯に粘し物の芽ととのはず  
丘の上を電車が通る桜かな  
くちべにが門歯に染まり三鬼の忌  
柿の木のあたり小暗し春のくれ  
入学す赤緒の定期くびに下げ

浦和  
竹内弘子

老 懶

アルパカの親子のまぶた春の雲  
白椿紅椿地を染めわける  
春風を吸ひこんでゐる土龍塚  
横断歩道半ばによるけ春疾風  
老懶を手なづけてゐる花曇

田端  
田中藤穂

花吹雪ボクはピッチャーボクバッター  
三味線草膝こそ揃ふ昼餉かな  
春雨や小学一年生初日  
熱爛の魔法瓶もて花の雲  
囀や声高鳴りて低くして

三光坂 東 亜 未

春夕べ鐘の余韻の棚引ける  
朧夜のバイクをふかす同じ刻  
雨音と競ふ蛙の昼下り  
強東風の夜更けの霧笛旅ごころ  
藤の花ゆるゆるやはい京言葉

富 田 長崎 桂子



等伯展見るための列さくらさく  
ぼうたんの蕾二つをいとほしむ  
青麦の穂先に少女ふれゆきぬ  
どの枝も空仰ぐかに松の花  
春の昼猫をからかふ鴉かな

大 宮 早崎泰江

春 疾 風

花の下何はともあれゆるゆると  
疾風にも見事戦ふ庭桜  
一陣の花の嵐に身を屈む  
そそくさと家に駆け込む春の雨  
さまざまな引出しをもつ春の宵

中 井 森山のりこ

落合森理和

おくるみのあかごは真つ赤春うらら  
紋白蝶乳房を支ふ母の指  
ねむりつつあかんぼゑまふ風車  
抱かれて泣きやむあかご春の雲  
青麦や息み伸びする赤ん坊

はる

鍋屋横丁 吉弘恭子

空いちめんにぎにぎしきや芽吹晴  
鶯に似たる小鳥がさくらから  
春の風まつぼつくりを抱へこむ  
徒雲のうしろ隠れの春の月  
殿を翔びて鴉に春の雲

大阪歩き

逸翁美術館

浸りきし芭蕉蕪村の春季展  
造幣局の桜に我を忘れけり  
大阪城を確と浮べて春の闇  
春燈や時々止る観覧車  
地図を手にまだうろたと春の夢

清瀬 赤座典子

髪染めぬ頭やまんば春の闇  
がたがたと下駄箱あらず猫の子が  
ため池の小さな筏亀の鳴く  
投票所桜吹雪の中に立つ  
満開の海棠庭に灯を点す

聖蹟桜ヶ丘 安部里子

罇をこぼさぬやうに句帳閉づ  
しゃぼん玉音なく割れて音が見え  
帆船は瓶の中なり春灯  
ぶらんこや鉄の鎖の握り跡  
芝桜ドミノ倒しのやうに咲き

曳  
舟  
遠藤  
実

山ざくら天上へゆく道しるべ  
名にし負はば桜山とて登りゆく  
春昼や階段数へる膝がしら  
冷たい日あたたかい日と花を追ふ  
爛漫と言へぬ桜の宴をはる

逗  
子  
鎌倉喜久恵

花

朝桜人の数だけ犬の数  
透きとほる猫の鳴く声花ぐもり  
花吹雪いさぎよしとも狂ふとも  
花疲れ下るにたよりなき手摺  
抜け道の思ひもかけぬ遅桜

川崎小由菜

木村茂登子

花 屑

たゆたひて藻に付く岸の花の屑  
花屑の島はゆふべの潦  
花の屑けふはいっぱい遊んだね  
八重桜一枝ひんやり持ち重る  
眠たげに山藤重なり合ひゆるる

京

橋

篠田純子



天国の見取図なりし入れてやる

燕工教師の茶髪かな

家系図のなき家系なる糸櫻

菜の花やふる里を図で教へけり

# あを柳集

兼題 図

佐藤喜孝 選

題詠の「図」に対し、まづ知る限りの言葉を想ひ並べる。料理で云ふ食材である。これだけではいつもの家庭料理しかできないかも知れぬ。そこで、辞書の力を借りる。知らない言葉がわんさかある。言葉のおもしろさに振り回されてしまふときもある。珍しい食材を料理するには別な知識も必要になるかも知れない。そうして使ふ言葉が増えてくる、思はぬ遭遇もある。題詠の御利益である。

天国の見取図なりし入れてやる

天国の見取図があるとは知らなかつた。もしかしたら作者には天国と思つてゐるところがあるのかも知れない。天国はあふぎ見るもの、それを俯瞰してゐる感がある。下五の不遜な言ひ回しとともにおもしろいとおもつた。

燕 図 工 教 師 の 茶 髪 か な

『坊ちゃん』の赴任先の学校の先生を紹介する件に

「画学の教師は全く芸人風だ。べらべらした透綾すきやの羽織を着て、扇子をばちつかせて、お国はどちらでげす、え？ 東京？ そりゃ嬉しい、お仲間が出来て……私もこれで江戸つ子ですと云つた。こんなのが江戸つ子なら江戸には生れたくないもんだと心中に考えた。

とあるやうに図工の先生は他の教科の先生とは趣がちがふ。図工教師なら茶髪でもさもありませんといふところか。燕は春の季語。すずやかな一句。

家系図のなき家系なる糸櫻

私も父方母方とも祖父母のあたりでうつすらとしてくる。家系図のないのが家系だと云ふ聞き直りの云ひ方は愉快。枝垂桜の枝振りを目で辿つてみると家系図のやうにも見えてくる。

菜の花やふる里を図で教へけり

子供にでも教へてゐるのだらうか。頭の中にしつかり収まつてゐる生家の間取、近隣の家並みなどを図を書きながら教へてゐるうちに故里の菜の花の景が浮かんできた。滋味ある句。



題詠「**凶**」（順不同）

家に系図なければ恋の猫つどふ

定梶しよう

天国の見取図なりし入れてやる

天気図の等圧線のけふ立夏

艦橋の海図や南風がなぶりに来

湖畔この凶柄涼しき皿時計

涅槃図やいないいないばーをして通る

東 亜 未

工へんてふ合図戸の外春つらら

愚図々々と決まらぬ会議花の雨

田中 藤穂

凶星突く幼子撫でる春の虹

凶書係新入生に囲まるる

燕図工教師の茶髪かな

茎立や図書館までの道まっすぐ

花の宴図図しくも胡座かく

図体をもてあましたる新入生

家系図のなき家系なる糸櫻

図書館へ廻り道して冬ざくら

図らずも仲人となる春ひと日

花の蔭片目で合図しあふ人

愚図ぐずと返事ためらふ春一番

異図すこし見え隠れする春の間

世界地図蟻が渡りし地中海

日と櫻いっぱい図画小学生

日本地図昨日も今日も櫻かな

吉弘 恭子

長崎 桂子

春たけなは図面確め地鎮祭

野放図に生きて還曆落苦し

篠田 純子

少年は図体ばかり蕨餅

図書館の堅き木の椅子花の雨

木村茂登子

春物や同じ図柄の色違ひ

涅槃図の猫は鼠を追はざりき

竹内 弘子

雪霏々と絵図面に頭を寄せ合へば

津波予想図列島をとり巻く春

江戸博に絵地図購ふ曼荼羅図

図書館の道を聞かれて花の風

鈴木多枝子

地図の食指で歩いて花の道

菜の花やふる里を図で教へけり

ふと思ふ図形は苦手花の冷

夏の山なほ襖繪に山水圖

佐藤 喜孝

中國の地圖に矢印古新聞

飛天圖に耳かたむける春の晝

愚圖愚圖と街に川あり姫女苑

爪切草砂漠の天氣圖一年分

蜜柑剥くグード圖法を範として

六月末日×切 句数自由

「国」(國 窓)

七月末日×切 句数自由

「回」(回)

紅梅のリンリンといふ数の頃

佐藤喜孝

逃げ水や自分で孫を産んだとか

篠田純子

旅はもう無理かと思ふ端居して

芝 尚子

坂の道いぬふぐり咲き金平糖

芝宮須磨子

軒深きところ鍛冶やが菜を干せり

定梶じょう

春岬 佐渡へ対って山下る

須賀敏子

落葉踏む若き日の音戻らねど

鈴木多枝子

あぢはひの深き石段梅二月

竹内弘子

いもうとの遍路終へしといふ便り

田中藤穂

春うらら幼児呼び合ふフルネーム

東 亜 未

ペダル踏む東風に向へば潮の香

長崎桂子



## 前月作品

外国語とび交ふ電車春うらら	早崎泰江
ちる桜手を結ぶ子と結ばぬ子	堀内一郎
昼の席春の障子をあげ放つ	森山のりこ
見えぬ雨閑かな刻の美顔術	森理和
雪椿双蛾に似たる仮名手本	吉弘恭子
ぷるぷると紅震はせつ雉子の飛ぶ	赤座典子
三月の喜寿迎へたる髭の夫	安部里子
卒業や徴兵検査のなき国で	遠藤実
花待ちの若木ほのかに紅をさし	鎌倉喜久恵
葬送の花の盛りでありしかな	木村茂登子
抗ひつつ老を馴らすや春の風	斉藤裕子

喜孝抄



## 五月作品より

吉弘恭子

紅梅のリンリンといふ数の頃

佐藤 喜孝

人も何かを体験するときは緊張したり力んだりしてしまふ。どの植物にとつても最初の一輪を咲かせるときは同じことだろつと思つ。桜になると、桜前線などと、全国の開花時期を教えてください。この句の紅梅は静かな環境のなかにいるのだらう。

「リンリンといふ数の頃」一読したときには全く意味が分らなかつた。が二度目には私の脳が回転しだした。

リンリンというのは一輪のリン。前述のように一輪二輪と咲き始めに梅の木の下に行つて数えてしまふ。満開になつたときの感動もなかなかいいものだが、興味は一輪咲いたときの方が何倍か大きい。この句は作者の感情は表出されていないが、「数の頃」と下五にすえたことによつて数の頃何々……と、秘められたものが多いことが分るし読み手にとつて色々想像も可能になる。想像できると言つことは句に奥行きがあると

言つことだ。

春の風魂だけで歩きをり

篠田 純子

冬の間力を入れて過ごした身にとつて春の爽やかな風は心までゆつたりとさせる。疲れがたつまた状態で日々の仕事をこなしていかなければならない主婦にとつて、心地よい風はなにもにもまさる力となる。

形容詞を使わずとも明確に伝えられるものである。

俳句はこのようにして作りたい。

人と来て道を憶えず鳥雲

芝 尚子

方向音痴は何人にも負けないほどの私であるが、外出するときは緊張する。

何時も回りにどなたかがおられる人にとつては、道など憶えずともよい。覚える必要がないのである。悔やんでいるわけではないのが鳥雲という季語にある。

鳥たちが寒い地に帰つた後の曇り空に安堵感が表れて

いる。季語は大切であると、今号も思っている。

それにしてもひとり居の作者であられるのに良い環境に過ごされているのは羨ましい限りです。

長寿眉と言はれその気に万愚節 堀内 一郎

長寿眉というとすぐ思い出すのが元社会党の委員長である。成人と認められ選挙権が与えられたら、社会党を応援すると決めそうしてきた。父の戦争体験話で何時も戦争というものは恐いぞ、自分で反対のことを思っているもみんなが始めた事に逆らうことが出来なくなるんだと言つのが口癖だった。日本で唯一当時は軍隊を持つのは憲法違反と言っていた党であるから。それが軍隊容認の自民党と組んで連立内閣を作った。若かった私にはとても不思議でならなかった。長寿眉というの良い感情が浮かばない。ところがこの句は万愚節にその気になったというのだ。不思議な季語が上五中七をキラキラさせている。季語って面白い。

卒業や徴兵検査のなき国で 遠藤 実

何の卒業であろうか。徴兵検査と言っておられるので大学であろうか。

戦争を体験したものと違って徴兵という言葉を聞く  
と胸が痛い。わが日本国は、徴兵制度がない。良いの  
か悪いのか若者がピリツとしないなどと遠くから聞こ  
えることがある。

ピリツとしないのは若者だけではないように思う。  
本当に徴兵検査のない国でよかった。その力を多方面  
に伸ばしていただきたい。「卒業や」と切ったことによ  
って万感の思いが句上に表れていないが、秘められ  
ているからこそ心にびびくものだ。





# 近世俳諧と漢詩文と漢詩文

参拾

王岩

春風如刀

顔いたき風のよそ目に柳哉

几董

この句は『几董句稿』に見え、句題の「春風如刀」の表現及び句中における「柳」の用語から考えると、句題は賀知章の七絶「詠柳（柳を詠む）」によるのではなからうか。

碧玉粧成一樹高、

碧玉粧成つて一樹高し

万条垂下緑糸繚。

万条垂れ下す 緑糸の繚

不知細葉誰裁出、

知らず細葉誰か裁出せしを

二月春風似剪刀。

二月の春風 剪刀に似る

賀知章（六五九～七四四）は初唐の詩人で、浙江山陰の人。四明狂客と号す。掲詩の七絶は中国では小学校国語教科書にも載っているほどよく知られている。故に、几董の「春風如刀」を句題とした「顔いたき風のよそ目に柳哉」を読んだ時、私は直感的に賀知章の七絶「詠柳」に思い当たったわけである。

賀知章は、早春の浅緑に芽吹きはじめた枝垂れ柳を青緑色の宝石で形容し、そして、春風を剪刀に喩えて柳の枝の細い葉を裁ったと詠んだ。色彩鮮やかなタツ子で、春風に靡く枝垂れ柳の美しさを描いている。「碧玉で飾ったような枝垂れ柳」や「剪刀の如き春風」という奇想天外な直喩法による枝垂れ柳の描写は見事で、あたかも絵画のようだ。

几董は師蕪村の漢詩趣味の影響を受けて漢詩を読み、それらを積極的に吸収しながら大いに句作りに生かしている。

京都の早春は風が冷たい。顔に吹き当たると、刀が触れるように痛い。しかし、春風に靡く柳を余所目ながら見ると、まるで刀みたいに冷たい春風を歓ぶように揺れている。あ、そうだ、この柳も彼の唐詩人が歌ったように、春風という剪刀によって裁たれたのかな。

賀知章の七絶を踏まえると、几董の句をこのように鑑賞することができるのではないか。



# あをかき集

竹内弘子選



図書館の窓を明るく桜咲く  
ヘルパーの仕事を終へて桜かな

須賀 敏子

自転車の荷台に降るや桜薬

鈴蘭や静かに暮れて誕生日

多摩の瀬を跨いで泳ぐ鯉のぼり

山峡の両岸繋ぐ鯉のぼり

春の月鼻づら白く馬睡る

鍵盤の象牙色なる春の昼

岩に顎あづけて亀の日永かな

あたゝかし播粉木ちびて母ぬます

正午いま静まりかへる桜かな

百幹の竹しなはせて春北風

衿あてて花冷の街さすらひぬ

三々五々虚子忌日和の句会かな

海光に蝶のまぎれて空白し

春寒し沖繩の唄聞いてをり

いつまでも冬物を着て椿掃く

逝きし人にはなしかけつつ花見酒

赤座 典子

草隴父母連れ立ちてくるやうな

田中 藤穂

桜薬降る道をくる豆腐売

子ら帰りおたまじゃくしに足生える

桜草よその赤ん坊すぐ育つ

門跡寺みどりの桜咲き満てる

鎌倉喜久恵

定梶じょう

白鷺のカメラ目線や河原石

花鳥の肩の西日をいとしめり

スリッパの左右なき梅ヶ宿

岡持はしづしづすゝむ春の風

白梅や力道山に墓ありぬ

湧くことも移ろふことも春の雲

花のもと猫がわたしを避けてゆく

対岸に煙のごとき桜かな

黄砂降る靖国神社の奥の院

折紙の自由自在や蛸蚪生れ

産見舞お玉杓子の日和かな

水槽のおたまじゃくしにパンの耳

風光る露西亜へ発つと笑み残し

噓せるほど乳出はじめる蓬餅

草蔭に花ゆるがせてつぼすみれ

つぼすみれ幾度も直す靴の紐

様々な出会と別れ桜冷え

料峭やイリュージョンめきビル消ゆる

佐藤 喜孝

芝 尚子

遠藤 実

森 理和

森山のりこ

篠田 純子

葉桜や老いねばならぬ齢なり

枝分れ枝分れして糸櫻

畳莫座胡座車座花の雲

双肩とおもき言の葉春一番

徘徊る吉野櫻の奥千本

水底の雲の上ゆく花筏

しばらくは爪の間に露のアク

浅刺煮や揖斐の河口の店先に

磯遊び荷物を見張る役回り

杖先に渦巻寄れり花の風

花は満開安達太良山は雪残し

東 亜 未

吉弘 恭子

木村茂登子

長崎 桂子

鈴木多枝子

### 選を終えて

草隴父母連れ立ちてくるやうな

藤穂

もしもあの世があるとしたら、いつの日か父母に再び会うことができるかもしれない。

ぼつと畑つたような野原の向こうから父母が連れ立ってくると思像するのもいい。

桜蔭降る道をくる豆腐売

〃

自転車のとくべつ大きな荷台に、縦長の木箱を載せて「豆腐売」のおじさんがくる。利腕で重たそうな木箱をおさえ、首に下げた小さなラッパを吹く。風くる時間がわかっているの、容れ物を持って待っている人もいる。中七までの詩の一行のような言葉ずかいが何ともいえずいいと思いました。

子ら帰りおたまじゃくしに足生える

〃

泊まりがけ遊びに来た子ども達と一緒に、「おたまじゃくし」を掬ってきたのでしょ。

比較的きれいな小川や田圃で見つけた記憶があります。足の生えたところを見せてあげたかったですね。

桜草よその赤ん坊すぐ育つ

〃

四六時中うちで見馴れている赤ん坊でも、日々成長の萌しが見えてびつくりすることがあるので、たまに見る「よその赤ん坊」の成長を「すぐ育つ」と言いたくなるのは面白いと思いますが、赤ちゃんのお母さんではないような気がしました。

ヘルパーの仕事を終へて花見かな

敏子

公的な認可を得たホームヘルパーだと思っています。きめられた時間に仕事を済ませてほっとした感じ。心置きなくお花見に行ける、浮足絶つようなお花見のシーズン、仕事のやりくりなども神経をつかわれ

ることでしょう。「花見かな」とさらりとまとまっています。

あたたかし播粉木ちびて母めます じょう

土焼製の鉢の内側にきざみ目のある播鉢。炒った胡麻を入れて播粉木で播るほどに、香ばしい胡麻の匂ひがたつ。予め茹でた菠薐草を絞って味噌や醤油さとうなどで和える。山椒の木で作った母の播粉木は、少し曲って播り減っていました。

百幹の竹しなはせて春北風 喜久恵

この辺りで知っている竹林といえは、南浦和の通船堀（小舟に収穫した稲を積んで江戸へ送り出した川）沿いの奥行の深い竹林。皮を脱いでずんずん伸びた孟宗竹が、撓うだけ撓っている様子がうかがえます。

湧くことも移ろふことも春の雲 尚子

寝転んで空を見上げていると、春らしい綿のような雲がふんわり浮かんでは消えてゆく。

天候不順が続いたので漸くおだやかな日差しが戻った感じ。伸びやかな春らしい一句。

対岸の煙のごとき桜かな //

天候不順のせいで桜の咲くのが遅く、いつまでも咲いていた。満開になると白っぽくもくもくと煙のように見えました。

黄砂降る靖国神社の奥の院 実

中国大陸から天空をおおって黄色い砂塵が日本に渡ってくる。戦争など国事に殉じた二五万余の霊

を祀るといわれる神社は、木立が繁っていて黄砂と結びつきませんでした。

数年前、時の首相が羽織袴で参拝に行く後ろ姿がテレビに映っていました。

噎せるほど乳出はじめる蓬餅

理和

乳児というくらいで赤子は母乳を飲んで大きくなる。稀に出にくい場合も揉み治療など治療法がある。お餅がいいというので餅菓子を食べたお母さん。赤ちゃんが噎せるほどお乳が出たということです。

葉桜や老いねばならぬ齢なり

純子

ユニークな句です。「老いねばならぬ齢」とはどんな齢な知る術もありませんが、仮に同年齢の人に比べて、体力その他において勝っているが、齢相応に老いねばならない、と言っているのでしょうか。

羨ましいことです。

豊莫座胡床車座花の雲

東亜未

とくに「胡床車座」は男のものという感じですが。男の坐るべき形があつて、お花見など人目のある所では、横座りなど姿勢をくずすことがないのではないかと思います。

徘徊る吉野櫻の奥千本

恭子

徘徊る、たもとおる、たはは接頭語で、同じ所を何度もめぐることだそうです。例えば、浜辺の歌」という唱歌に「ゆうべ浜辺をもとおれば」と接頭語のないつかいかたもあります。奈良の吉野山の櫻は日本一だそうです。

四月の句会

傳 中野区 カフェ傳

いく度も死なぬ病を紅ざくら  
大根を買ふ献立を考へず  
口紅が門齒に染まり三鬼の忌  
水鏡幽かに歪けて春の雨  
竹藪に風静まりて二輪草  
ふりむけば昏き光のさくらかな  
アルパカの親子のまぶた春の雲  
春の川水の他には流れなし  
野仏の頬染めたるや山桜  
花吹雪いさぎよしとも狂ふとも  
春の風邪魂だけで歩きをり  
鶯に似たる小鳥がさくらから  
ベチユニアを植えて同居の子等待つ  
よもぎ摘む媪の話語りめく  
花吹雪青赤黄の帽子跳ね

喜孝 尚子 弘子 実子 敦子 藤穂  
文子 子 子 子 子 子  
寒林 敏子 茂登子 純子 恭子 裕子 泰江 理和

高窓の風春めくや受診待つ  
あかんぼの爪立ちをして春の土  
横断歩道半ばによろけ春嵐  
チューリップ少女剣士を募集中

友七 喜孝 藤穂 綾子

調

岸町公民館

春寒し動く歩道を急ぎ行く  
期せずして拍手起りぬ花吹雪  
人參咲き愛憎にぶくなりにつけり

泰江 敦子 弘子

あを吟行会 東大医学研究所

花散るや日ざしのなかのひざの上  
いぬぶくり日を掠めたる道の端  
京徳ぶ枝垂桜の紅濃ゆし  
三味線草膝を揃へし昼餉かな  
消え入りさう牡丹桜に長く居て  
鳥はかずふやさずにとび花は盈ち  
家畜群霊塔花散る研究所  
かたばみ草ばかりに風の来てをりぬ  
花曇野口英世の年賀状  
サクラサク市民のためのガン医療  
ハイファツション纏つて犬の花散歩

房代 恭子 藤穂 東亜末 喜孝 木枯 綾子 喜久恵 典子 敦子 美代子

空いちめんにぎにぎしきや芽吹晴  
青空とふらここを置く水溜り  
春燈は雨の鉄路のむかう側  
桜薬降る道をくる豆腐売  
杖先にまろび渦巻く花の風  
てのひらに絵付の茶碗春の夜  
熱爛の魔法瓶ある花見かな  
春灯やふつと恩師をなつかしむ

恭子 尚子 喜孝 藤穂 多枝子 綾子 東亜末 房代

七座句会

中野区・小川苑

連句勉強会 毎月第2日曜  
希望者は左記まで (090-9828-4244)

傳句会 毎月第2火曜  
カフェ傳 森 理和  
(03-3368-4263)

調句会 毎月第3金曜  
岸町公民館 竹内弘子  
(0488-86-3501)

あを吟行会  
詳細は吟行案内で

七座句会 毎月第4火曜  
小川苑 吉弘恭子  
(090-9839-3943)



あとがき

「あを」は手作業製本。中綴をするので頁数は4の倍数にしなればといふ制約がある。無理な増減をする月もある。今月は「あを柳集」が通常の位置より前に出した。これも右記の事情である。ご理解を。

マスコミでは政権が短命であると嘆いてゐる。その原因を縷々述べてゐる番組もあつた。マスコミは触れないがあゝ頻繁に行はれる世論調査といふものもその一因を成してゐるとおもふ。余りにも国民の声を聞きすぎるやうにもおもへる。庶民がマスコミに鼻面を引きずり回されてゐるやうに思へてきた。

五月の千駄ヶ谷の富士塚吟行は愉しかつた。近場でまだまだ知らないところがあるものと改めて知つた。お昼を頂いたところは広々としてゐて石庭をながめながら美味しい料理を戴いた。句会もゆつくりと済ませることができました。お世話くださった都築さん、ありがとうございました。

表紙の姫睡蓮は傳の庭で、扉の猫は芝尚子さんちの

「もも」です。

### 吟行案内

場所 神田川吟行

集合日時 7月17日(土)十一時

井の頭線「井の頭公園」駅ホーム

今回は神田川の始まりを訪れてみようとおもひます。参加希望者は七月十三日まで 幹事・佐藤喜孝

二〇一〇年六月号

発行日 六月八日

発行所 東京都中野区中央2・50・3  
電話 090・9828・4244

印刷・製本・レイアウト 佐藤喜孝  
竹僊房

カット/恩田秋夫・松村美智子  
表紙・佐藤喜孝

郵便振替 00130・655526(あを発行所)  
会費 一〇〇〇〇円(送料共)/一年

乱丁・落丁お取替えます。